

### 全校集会(2月6日<苦しさも楽しみ>)

私が入門している道場では、週に1回、特別練習をします。冬場の特別練習はとても苦しく、ふらふらになってしまうこともしばしばです。この練習には中学生以上が参加できます。最高齢の参加者は70歳です。仲間がいるからこのきつい練習に耐えられる、生きているから味わえると、66歳の先輩は、この練習を楽しんでいると言っています。苦あれば楽ありとか、苦しさを乗り越えてこそ真の楽しさを味わえると言われたりしますが、「苦しさそのものを楽しむ」気持ちは大切であると思います。

「<sup>かんなんなんじ</sup>艱難汝を玉にす」、人は多くの困難や苦勞を乗り越えて、はじめて立派な人物になれるのですが、<sup>せつなてき</sup>刹那的な生き方が蔓延しているように思えてなりません。努力だの辛抱だのは泥臭いとする風潮は、誠に由々しき問題であると思います。

### 日本人は無規範ではない

「あなたの宗教は」と問われれば、日本人の多くが無宗教と答えるのではないかと思います。そう答えても日本人は違和感をもたないのですが、キリスト教徒やイスラム教徒のように、宗教が生きる規範となっている外国人には理解できないことのようにです。無宗教=無規範、即ち野蛮人との認識ですから、無宗教の人間は信用できないし、そんなことでは「どうやって子どもを育てるのか」といった疑問も投げかけられることでしょう。

新渡戸稲造は、1889年、アメリカで「武士道」という本を出版しました。この本は英語で書かれましたが、いろいろな国の言葉に翻訳され、日本でも出版されました。アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトは、一晩で一気に読み、そして、感動した彼は多くの知り合いにこの本を配ったのだそうです。新渡戸がこの本を書いた動機は、ベルギーの法学者から、「君の国では、学校で宗教の教育をしないと言うが、何で君のような立派な人間ができるのだ」と聞かれたり、妻のマリーさんから、「あなたのような立派な人が、日本という国で育ったのは何故なのか」と再三聞かれたりしたことでした。この本は、武士道が単に武士のみの規範ではなく、長い年月をかけて日本人の規範となっていることを知らしめたのでした。

節義、勇気、礼儀、誠実、名誉、品性、克己等、新渡戸が武士道の本質として述べたことは、現代でも多くの日本人の規範となっていることでしょう。今まで世界で最も犯罪の少ない国、秩序ある社会を形成していたのはその証だと思いますが、昨今、この規範意識が薄れてきていると危惧する声が多くなっています。武士道精神がこの国から消滅することのないようにしたいものです。

### 会議は研修の場でもある

この時期は、どこの学校でも会議が多くなります。本校の会議では、かなり意見が出され、とてもよいと思います。一人一人が思うところを存分に披露したなら、それによって皆さんの認識も深まります。人間には、自分の世界に納まろうとする傾向があるように思います。自分の殻を破り、新たな世界を切り拓くためにも会議は役立ちます。会議は研修の場でもあります。

### 改革には勇気が

教育界ほど改革に消極的なところはないように思います。民間会社なら、改革をためらったりしていたら、業績を上げることができないばかりか、倒産の憂き目にあうことだってあります。それがないせいでしょうか、突出を避け、横並びを志向する習性が染みついてしまったかのようです。

佐藤栄作総理大臣(故人、ノーベル平和賞)は、首相就任の心境を「啄木鳥が餌を求めて木の天辺<sup>てっぺん</sup>まで登ってきた。しかし、そこには何もなかった」と報道陣に語った。首相になっても大きく変わるほどのものはない。地位や権限が与えられても、その意志がなければ何もできない、ということをお教えたように思っています。

創造を語り、勇気や思いやりを語り、自己主張を勧めたりと、人を育てる立場の私たちが、正義感や勇気をもって、主張すべきことは主張し、行動できなくてはいけないでしょう。まずは私たち教職員が、範を示すべきではないかと思えます。

### 真の日本人に

「今は国際化の時代と言われ、国際舞台で活躍している人も少なくはありません。国際化の時代に生きていくには、語学も大切だが、もっと大切なのは、日本人としての誇りや自信をもった真の日本人になることではないかと思えます。人情の細やかさ、誠実さ、心豊かで親切、思いやり、勇気、我慢強さ、礼儀正しさ等、過去の日本は、外国人に称えられました。今こそ本来の姿を取り戻すべきではないかと思えます。国や郷土に、愛着や誇りをもってほしい。」と卒業式の式辞に述べました。

外国人は自国に誇りをもち、国を守る気概も旺盛のようです。国旗も大切に敬意を払います。なのに日本は、愛国心を語ることさえはばかれる雰囲気があるようですし、祝日も国旗が掲げられない状況です。日本を訪れたアインシュタイン博士は、この国を絶賛しました。土田国保元警視總監(故人)は、防衛大の校長として、「真の紳士にして、真の武人であれ」と防大生に精進を促し、土田校長の薫陶<sup>くんとう</sup>を受けて育った番匠幸一郎第一次イラク復興支援群長は、「武士道の国から来た自衛官らしく、規律正しく堂々と任務を遂行しよう」と抱負を述べ、立派に任務を果たしました。そして、イラク人の高い評価を受けたのです。

この国への誇りや気概がなくては、皆さんのために働ける人間にはならないと思えます。

### 順風満帆な家庭などない

生徒指導で保護者と話し合っていると、時々、我が家はダメな家庭、とても惨めで皆様に顔向けできないといった心境を吐露する方がいる。そんな時、私は必ずこのように話しました。世の中、順風満帆な家庭などない、どこの家庭でも他人に話せないことが一つや二つ、あるいはそれ以上あるものです。人がうらやむ家庭でもそうです。話さないから知らないだけなのです。

人生には、得意の絶頂の時もあれば、失意のどん底の時もある。順風満帆な人生なんてない。そうでなければ、人生山あり谷あり、なんて言葉が語られることはない。家庭だって同じです。長いこと生きていくとそのことがよく分かります。明けない夜はないのですから、元気を出して生きてほしいものです。